

“マウントって何？人間なのに…”

この間“推しの子”を観ていた時に“あの子、マウントを取りたがる…”という言葉が出てきました。“マウント”というのは、そもそも動物が自己の優位性を示すために相手にまたがることから出た言葉です。確かに動物番組を観ているとサルやゴリラなどの集団ではよく見られます。では、人間だと…自分が相手より優位にあるとアピールする行為だそうです。自分からすると、なんて意味のない行為だろうと思ってしまいます。本校の校訓“未来貢献”を達成するための1つに「多様性を認める」があり、“マウント”は、これに最も反する行為であるということは、いろいろな場面で自分が話してきたので、皆さんには、きっと理解されていると思いますが…。

人が自分と他人を比較し始めるのが、小学2年生の頃だそうです。そして、この小学2年生の頃が小中高等学校のすべての中でいじめ発生件数が、一番多いそうです。小学2年生ぐらいの年齢だと、まだ言葉を考えて言うことや、考えて行動することは難しいです。だから、自分の基準しかないで、できない人(勉強やスポーツ、ゲームなど)に「何でできないの?」「ちゃんとやってよ」など、できない人をばかにするような言葉や、態度(無視したり、叩いたり)がでてしまうのではないかと思います。何でもできる方が偉い、できない方はダメ…という判断しかできないのかもしれませんが、しかし、学校生活を送っていく中で、いろいろな人が周りにいて、その人たちと自分は同じ立場であることを様々な場面で学んでいきます。それなのに、いつまでたっても“マウント(以前のスクールカースト上位)”にこだわる人は少なからずいるようです。とても残念なことです。もし、動物の世界だとすれば“マウント”をとっているうちはいいですが、一度でも負けるとその群れから追放されたり、常に攻撃の対象にされたりします。

『実るほど頭を垂れる稲穂かな』は、偉い人ほど謙虚な姿勢で接することが大切であることを意味する言葉で、昔から使われていました。スポーツでも映画でも世界で活躍するような人のほとんどは、みんな謙虚で周りから慕われています。こういう人たちは自分が有名になり、活躍することができるのは、家族や友人、自分をサポートとしてくれる人がいるからということをよく理解しているので“マウント”をとることはしません。本校でも学校行事が楽しくできるのは、先生方のサポート、先輩たちのリーダーシップ、そして仲間の協力があるからです。そして、それを理解した人たちは、“マウント”をとることはしません。“マウント”は集団生活において、マイナスの行為であり、みんなが楽しめないということを知っているからです。皆さんは、どうですか？まだ、“マウント”をとっている、取ろうとしている人はいませんか？本校には、自分が感心するような言葉かけ、行動をできる人がたくさんいます。是非、そういう人を見習って、“マウント”という言葉が本校には存在しないようにして欲しいと思います。